



# ねこ



ゆずたちばな

## 猫

---

大昔、俺ら人類の祖先は、リサイクルと称して

アルミ・スチール・段ボール・新聞紙・雑紙・ペットボトル・プラスチック・乾電池等々  
気が遠くなるほどの作業をして資源を守ろうとした。

何をしようと資源を消費しては、何時になっても天然資源を増やすことが出来ない。

そこで偉い人たちが考えたのが“雲”と呼ばれる共通認識空間。

これがまた超便利なシステムで、歴史に疎い俺には、頭が痛くなるような分けの解らない工程を  
経て

全人類が貴重な体験を共有できるというシステムを作り上げたということらしい

・・・のか？いや、ごめん、よくわかんない。

俺に分かることは、朝起きたらトーストを焼いてコーヒーに砂糖とミルク入れて飲んで

時間を気にして玄関開けて駅に向かって

満員電車で職場に行って

大昔は、手作業でキーボードという楽器を使って打ち込んでたらしいけど

今は全て“光”に当てればいいだけで

いや、上司に言わせると、これもアナログの骨頂らしいけれど

金回りが悪いから拡張できないとか言われ続けながらも

回ってきた注文電票の入力の作業を昼までやって

昼のサイレンが鳴ったら飯喰いに出かけて

昼めし喰ったら仮眠して、午後も三時までは、作業をして。

三時になると、事務で唯一の女性である藤井さんがお茶入れてくれて

お茶と一緒にホームメイドなクッキーとか漬物とか

好きじゃないけれど食べるように言われて。

だいたい、50過ぎのおばちゃんの作った食べ物なんて、喰う気しないだろ。

でも、遠慮しないで食べる言うし。

食べないと機嫌悪くなるし。

機嫌悪くなると、茶に何入れられるか分かったもんじゃないし。

でも、まあ家庭的っていうの？そういう感じって

なんか和むというか、嫌いじゃない気もするし。

で、適当に話し合わせて、午後の作業を終えてだ

上司が

「今日は、社内親睦会だから、みんなで飲み会を...」

とか言ったりすると、付き合いっていうのも、めんどくさいけど

積立金が勿体無いから、付いて行ったりして

なるべく目立たない座敷の隅っこに座って

まずはビールで乾杯して

それから、出される料理を食べて

なんてやってると、また、唯一の女性である藤井さんが、やってきて

「ほら青年、コップを空けないか」

とか言って、ビールを注いでくれるから呑み続けてるうちに

どんどん気分が良くなってきて

それでも、酔っぱらってることを周囲に悟られないようにして。

小説とかだと、呑み続けてうちに酔っぱらってハイになり過ぎて  
トラブル起こして、会社首になったりして  
そこから物語とか始まったりしちゃうんだけど

俺そんな度胸ないから。

トラブル起こすほどの会話もできないし。

なんというか、刺身に付いてる小菊的存在で

あっても無くってもいいけど

使いまわしは出来る的な、ある意味できる存在だから。

とか、ぼんやり考えてるうちに宴会は、お開きになって。

二次会とかも最近は、みんな遠方から通ってるからありえないし。

足元ふらつかせながら電車に乗って、アパートに帰って玄関開けて

シャワー浴びて、冷蔵庫から冷えたコップと水出して

コップにビールの粉末入れて呑むとこれで今日も一日終わったな...

なんてしみじみ思ったりして。

でもなあ、この先の見えない生活っていつまで続くんだろうな。  
めんどくさいよな。

彼女でも出来たらなんか変わるのかな。

とか、思いながら3匹の猫に餌やると

この3匹がいたら、彼女もいないかな。

めんどくさそうだし。

と思ううちに寝ちゃったよ、おい。

まただよ、また始まるよ。一日が。  
なんだ無限ループだ。出られない。

そうも言ってもらえないんで、とりあえず支度して....。

そんなある日

「藤井さんの糠漬けは、意外と美味かったな」  
なんて思いながらアパートに帰ると  
俺に一件の伝言が言いわたされた。

スパム以外で伝言を受け取るのは、何ヵ月ぶりだろう。

【来る8月15日 正午より 市立西中学校 第148回生同窓会を開催 参加者は返信を】

数年おきに開催されている同窓会の伝言。

例年なら、特に何も思わず無視し続けてはいたが

なぜだか急に、くせ毛のモンチッチの顔が思い浮かんだ。

モンチッチは、肌の黒い手足だけがやけに細い女子である。

無口な俺にやたらと下らない情報をもたらしてくれた恩人でもある。

そしてモンチッチの隣には、いつも透き通るような肌の色をした姫がいた。

毎年、クリスマスイヴには、小さなケーキをくれて  
バレンタインには、手作りのチョコをくれた。

告白しようとしてチャンスを逃がし  
いまだに小さな心の傷として残っている。

一度しかない“青春”真っ只中の夏。

閉塞感を抱いて嘆いているくらいなら  
長年の深層に残る宿題を提出して

砕け散った方がいいのかもしれない。

そう決意して俺は、【出席】の返信した。

髪を切り、スーツと靴を新調したら夏のボーナスが消えた。

それでも、いつになく充実した気分だった。

クラス会は、地元のこざっぱりとしたビストロでビュッフェスタイルで行われた。

同窓会執行部の幹事が簡単な挨拶をしたあと  
担任の挨拶があり、乾杯の音頭は、級長が行った。

「いやぁ～珍しいこともあるもんだ。佐々木が来るなんて。俺のこと覚えてる？  
「覚えてるよ、佐光だろ。前髪チョット薄くなってないか？オヤジさんに似てきたな」  
「それ、言わないのが優しさだから。まだまだガラスの心もつ少年だから俺」

今までクラス会に来なかったのを後悔するぐらいに、会話が弾んだ。

「佐々木よぉ～俺らの姫さま、ついに結婚が決まったんだとよ。  
お相手は、陸上部のエース“卓”  
まぁ～意外性も何もあったもんじゃないよな。  
中学時代から足掛け15年純愛を貫いたというんだから漫画化決定だな」

(当たる前に砕けたか...)

それでも、一言だけ言いたくなって俺は、姫に声をかけた。

「ひめさま～、この度は婚礼の儀整いましたそうで大変おめでとうございます。  
臣下の長として大変な喜びを感じずにはおられません。

一言だけ、言わせて頂けるのなら、  
若き日のわたくしの理想の姫は、ひめさまでございました。  
心より、ひめさまの幸せをお祈り申し上げます」

「ありがとう。佐々木君。  
久しぶりに会えて良かった。  
式はね、教会で挙げるの。  
式は誰でも参列できるから、佐々木君も来てね」

「ははぁ～ひめさまの晴れ舞台、しかとこの目に焼き付けに参ります」

心に小さな痛みを負いながら答えたけれど

なぜだか気分は、晴れ渡っていた。

「佐々木～残念だったな～姫の婚約が決まって」

少しハスキーでおどけた声の方を振り返ると、モンチッチいた。

大人の階段上ったモンチッチは、  
相変わらず地肌の黒い手足の細い女に育っていた。

「相変わらずだなぁ、モンチッチは。  
中学校時代から変わってないじゃないか」

「君に言われたくないなぁ佐々木君。  
君も相変わらず“生白い”えのきだけのようじゃないか」

にこにこ優しく微笑む姫さまの隣に精悍な肉体美を持った卓が現れた。

「おお、佐々木と山田、久しぶりの夫婦漫才か。相変わらず仲いいなぁ」

(仲がいい？そんな風に思われていたのか、俺ら)

軽い戸惑いが脳裏を過った。

「11月、式だけだけど来てくれよな。彼女のブーケトスは、山田を狙うようにしとくから」

(それはどういうことかな?)

とは言えず、苦笑いを繰り返した。

得も知れぬ充実感を味わいながら帰宅し  
三匹の猫に餌をやりながら、今日の出来事を報告した。

十月も末になり紅葉が街に降りてきた深夜、突然玄関を叩く音がした。

「どちら様ですか？」

こんな時間には、流石の押し売りも宗教屋も訪ねて来ない。

不審に思いながら問うと

「佐々木～わ・た・し～君の憧れモンチッチこと山田で～す」

と、馬鹿陽気な返事が返ってきた。

無言で扉を開けると、そこには、Tシャツにジーパン姿のモンチッチが立っていた。

「悪いけどさ、今晚泊めてくれないかなあ。  
都内でライブがあって終電逃しちゃって、手土産持ってきたから」

と言いながら、コンビニの袋を差し出してきた。

「大丈夫だから、泊まるだけで何もしないから」

モンチッチは、そう言うと靴を脱いで上がり込んできた。

(おい、それは本来ならば俺が言うセリフだろう)

と思いつつ部屋に上げた。

化粧気もなく、色気もないのでその気になるわけもなく



「じゃ、私はリビングで眠るから君は、トイレ付近で寝てね」

と、奴は言い放った。

(解せぬ、だが止む負えぬ)

と思いつつも毛布と布団を抱え俺はトイレ付近に移動した。

「あ、明日は始発に乗るから、君は気にせず寝てて。私は、勝手に出てくから」

そう言うなりモンチッチは高聲を掻き出した。

(もう寝たのか...馬鹿は気楽でいいな)

尊敬にも似た気持ちが芽生えた。

俺は、布団と枕が、トイレの便座に触らないように気を付けながら眠りについた。

翌朝突然

「ちょっと邪魔、どいてくれないとトイレ使えない」

蹴りを入れられ、飛び起きた。

(あれ、俺は気にせずに寝てればよかったんじゃないか...)

と、思いつつ起き上がり、

キッチン前の床に座り込み寝癖の付いた髪をかきながらモンチッチを眺めていた。

トイレのドアを大きな音を立てて締めた後

モンチッチはキッチンで水道の蛇口をひねり床を水浸しにしながら

顔を洗い何かの液体を顔に塗り最後に口紅を引いてバッグを抱えて

「佐々木、世話になった。また今度」

と言って出て行った。

その勢いに押され、俺はただ右手を挙げて

「おう」

と、答えることしかできなかった。

しばらく呆然とした後ふと我に返り

(俺も仕事に行く準備しなきゃ)

と思いシャワーを浴び、トーストを焼いてコーヒーに砂糖とミルク入れて飲みながら

(もしかしたら、男というのは、昨夜のような場合、  
己の中の激しい何かと戦いつつ一晩悶々と過ごすのが正解であり  
女というのは、まだ目覚めぬ男の為に軽い朝食の準備をして  
“起きたら食べてね、ありがとう”なんてメモを残して  
音も立てずに出てい行く様子を背中で感じるのが正解なんじゃないのか)

と考察してみた。

ま、経験値が浅いというか皆無なんで考えないようにして、出勤することにした。

その後も何の前触れもなくモンチッチは

最終電車を逃すと突然現れ

小さな竜巻を起こすように俺の生活をかき乱すことが数回あった。

人間、それが日常化すると特別これといった感慨もなく過ぎていくもののように

少しづつモンチッチのコスメと呼ばれる私物が水回りに侵略を始めた。

(これは、何とかしないと俺の領土が陥落してしまう...)

という危機感を持ち始めたころ

街には、秋風が吹き始め

1 1月の吉日遂に、麗しの姫の結婚式が訪れた。

俺はこの日の為にフォーマルな背広を購入し靴を新調した。

たとえボーナスが吹っ飛んだとしても、この日の装いは万全なものにしたかった。

呆れるくらいに絵になる新婦と新郎は、

共に純白の装いで、赤い絨毯を一步ずつ踏みしめながら

光り輝くステンドグラスのもと永遠の愛を誓いあっている。

男子は空を仰いで絶望を感じ

女子は自分の事でもないのに感動の涙を流していた。

セレモニーが終了し、写真撮影をする新郎新婦を礼拝堂に残し

参列者は外に出た。

式を演出するスタッフから女子は、パステル色の様々な花びらの入った籐の籠を渡され

男子は、米を渡された。

雲一つない澄み切った青空を見上げ、俺の中で一つの時代が終わった気がした。

写真撮影の終わった新郎新婦が、扉から出てくると大きな拍手が沸き起こり、

祝福の声と共に花びらが撒かれ、米が飛び交った。

男子は半ばやけくそ気味にコメを新郎めがけ投げつけた。

「節分の豆まきじゃないんだからお前らっ」

笑い声と共に談笑が始まった。

女子は、新婦と一緒に順番に記念写真の撮影を始めた。

「素敵な式だったよねえ」

傍らにモンチッチが来て俺に声をかけてきた。

モンチッチの目は涙で潤んでいた。

いや、モンチッチではあるが今日、モンチッチは、モンチッチじゃない。

顔は白いし髪は綺麗にセットされてるし、

なんというか晴れ渡る空に映える銀杏の葉っぱのような色のワンピースをも着ている。

「15年越しの初恋はあっけなく終了か...」

ため息を漏らすように山田は呟いた。

秋風が心隙に入り込み、俺の何かが弾け飛んだ。

「ブーケトスお願いします」

という声がかかり

姫は白いウエディングドレスの裾を翻し、背中を向けた。

軽く振り返り、なぜだか俺らの方に向かって微笑みかけ

白い手袋から青い空に向かってブーケが舞った。

周りの声が遠くなる中、時が止まるようにブーケは、山田の胸の辺りにすっぽりと収まった。

瞬間、突然時が流れ出し、拍手と共に笑い声やらブーケを受け取れたことに対する称賛の声やらが聞こえてきた。

俺の隣で山田は、笑いながら泣いていた。

二次会会場でしこたま酒を呑んでも、2.5次会で呑んでも、その日は酔わなかった。

俺は、三次会には参加せず自宅に戻った。

背広を脱ぎ棄てシャワーを浴び一息ついて猫に餌と水をやり

今日の日の出来事を話した。

胡坐をかいた膝を奪い合うように猫が乗ってきた。

深夜再び何度か目の扉を叩く音がした。

山田だった。

「ごめん。終電逃しちゃった。また、泊めて」

笑いながら山田は上がり込み、いつものようにシャワーを浴び

置きっぱなしになっていた白いシルクのパジャマに着替え、俺の横に座った。

「今日は、良い日だったね。友達の幸せを感じる事が、こんなに嬉しいことだなんて思いもよらなかった」

山田は、微笑みながら言った。

コンビニで買って持参したビールを空けて俺に手渡し自分の手にも持ち

「乾杯！」

と言いながら飲みだした。

その喉元を見ていたら、俺の中の俺が目を覚ました。

俺は、ビールの缶を床に置き、山田を抱きすくめ初めての経験をしようと試みた瞬間、

『…パチンッ！』

と小さな火花が散って目の前が真っ白になった。

気が付くと俺の中にいたはずの山田は消え、傍らに置いたビールも家具も扉も全てが消え去り、

目の前には、ぼんやりと白く発光したドームだけが広がっていた。

「Not Found Not Found Not Found Not Found Not Found Not Found」

銀色に光る文字が無数に浮かび上がる。

(今頃、酔いが回ってきたのかな...)

と思った俺の膝に猫が登り俺の頬を引っ掻いた。

(ああ...そうだった)

思い出した。

中学卒業の時、国に提出する【生涯必需品申請】に【猫三匹】って書いたんだっけ。

そうだ、そうだ、思い出した。

失敗したなあ。あの時【モンチッチ山田】って書いとけば、良かったんだ。

ごろごろごろごろ喉を鳴らしながら

“にゃお～ん”

と、甘えた声で猫が鳴き、ざらざらとした舌で俺の顔を舐める。

柔らかく、ふかふかとした感触が暖かい。

凍え始める白い半径2mのドーム。

(うん、まあ、リアルでは猫が良いのか)

突然、途絶えた雲の向こうの“モンチッチ”を思いながら俺は、猫を抱き上げた。